

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 30 日現在

機関番号：12501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23720171

研究課題名(和文)近代ロシア国家形成期における文学と風景表象

研究課題名(英文)Literature and landscape in the 18th and early 19th centuries Russia

研究代表者

鳥山 祐介(TORIYAMA, Yusuke)

千葉大学・文学部・准教授

研究者番号：40466694

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円、(間接経費) 990,000円

研究成果の概要(和文)：18-19世紀初頭のロシア文学に現れた風景表象を、同時代の社会的文脈との関連の中で検討することで、風景表象とロシアのナショナル・アイデンティティとの関連など、新たな視点を近代ロシア文化研究に提供した。現時点で4本の論稿が発表された。学会、シンポジウム、研究会等における発表、海外の研究者や歴史学など他分野の研究者との交流などを通じて、狭い意味での専門分野にとらわれない研究の遂行と研究成果の積極的な公開に努めた。

研究成果の概要(英文)：This study offers new insights into modern Russian culture by investigating representations of landscape in Russian literature of the 18th and the early 19th centuries. The results show links between the concept of Russian national identity and the image of landscape. Four papers based on this research have been published. Presentations were also given at the conference, the symposium and several meetings.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：ヨーロッパ語系文学

キーワード：ロシア 18世紀 19世紀 風景

1. 研究開始当初の背景

(1)

ロシア文化史における 18 世紀は、近代ロシア国家の基礎が築かれた時代であり、近代以降のロシア文化を考える上で鍵となる非常に重要な時代であるが、日本のロシア文学研究がプーシキン以降に偏っていたこともあり、文学を通じたアプローチによる 18 世紀ロシア研究は日本では極めて遅れていた。

(2)

ロシア(旧ソ連)本国は、一次資料の豊富さにも助けられ、この分野でもかなりの研究蓄積を誇っており、特にサンクト・ペテルブルク(レニングラード)の科学アカデミー・ロシア文学研究所がその中心的な役割を担っていた。とはいえ 18 世紀ロシア文化の担い手であった貴族階級に対するイデオロギー的な偏見によるネガティブな評価や、同時代の西欧文化や近年の欧米の文化研究の方法論への目配りが不十分であった点が、18 世紀ロシア文学に対する理解を偏ったものにしてきた。ソ連崩壊後は、ロシアと欧米の研究者の交流が盛んになり、こうした状況はかなり改善された。そして、18 世紀ロシア文学を当時の大きな文化的・社会的・国際的コンテクストの中でとらえ直す動きが、ロシア、欧米の研究者の間で広く見られるようになっていく。さらに近年は、ヨーロッパ的教養を備えた貴族文化が優勢な時代として 18 世紀から 19 世紀初頭(1820 年代)までの時代を一続きにとらえる傾向が出てきている。とはいえ、現在あるような 18 世紀ロシア文学・文化研究はまだ若い研究分野であり、より多面的な研究の余地を残している。

(3)

研究代表者がこれまで試みてきたのは、汎ヨーロッパ的文脈の重視や分野横断的手法など、比較文化論的な視点・方法論を取り入れることで 18-19 世紀初頭のロシア文化研究に新しい地平を切り拓くことであり、その中で特に注目してきたのが視覚文化の問題であった。日本学術振興会特別研究員として研究に携わった平成 18 年 4 月～平成 19 年 9 月、および科学研究費の交付を受けた平成 20 年 4 月から現在にかけて、「ピクチャレスク(絵画的性)」や「崇高」の問題に重点的に取り組むほか、18 世紀ロシアの詩文学と宮廷儀礼や戦争といった当時の政治的コンテクストとの関連性について一定の研究成果を上げて複数の論文を発表した。一方、ピクチャレスクや崇高の問題は当時の政治的文脈と密接な関わりを持つが、研究代表者がこれまでの分析で明らかにした「視覚表象の中の政治性」は、頌詩の視覚描写や宮廷儀礼などはっきりと政治性を帯びた領域に偏っており、風景への視点などに「隠された」政治性については示唆に留まっていた。また、ロシアにお

ける文献収集では先行研究が取り上げていない旅行記や庭園論など多くの資料に接し、ロシア文学における風景の問題を考察し体系的に記述するためにはそれらの資料を十分に踏まえる必要があることを痛感した。

(4)

以上の点を踏まえ、表象論がもたらす視覚やピクチャレスクに関する理論的な裏付けと、数々のテキストや歴史的知見とを突き合わせながら 18-19 世紀初頭のロシア文学における風景の問題を総合的に考察すべく、本研究を着想するに至った。「自然の美」の規範を自然そのものではなく既成の風景画に求める「ピクチャレスク」と呼ばれる美意識が、18 世紀末のデルジャーヴィン、カラムジンから 19 世紀前半のゴーゴリに至るまでのロシア文学において大きな役割を担っていることや、マルティノフの旅行記(1819)で描かれたロシア帝国の風景にこの概念が大きな影響を及ぼしていることは本研究開始の時点において既に明らかにしており、本研究はその問題意識を継承するものである。

2. 研究の目的

(1)

本研究は、18-19 世紀初頭のロシア文学における風景表象の考察を通して、近代ロシア国家形成期においてロシア内外の風景はどのように見られたか、それはロシア文化のアイデンティティとどのように結びつくのか、またこの時期に現れた風景表象のあり方はロシア文化全般の推移の中でどう位置づけられるのか、といった点を明らかにすることを目的とする。

(2)

特に本研究では、同時代の美学やロシアの政治文化など複数のコンテクストを考慮し、この問題を広い文化史的な文脈の中で読み解くことで、近代以降のロシア及びヨーロッパ文化に関する総合的な理解に資することを目指す。そのため、この時代にカラムジンの影響下で数多く書かれたロシア国内の旅行記、「ピクチャレスク」など美学上の概念、それにロシアにおける視覚概念の変化といった多くのファクターの中で上記の問題を多面的に考察する。

3. 研究の方法

(1)

本研究では、18-19 世紀初頭のロシア文学の中の風景表象における政治・社会的ファクターと文学・芸術的ファクターの相互緊張関係を探究することにより、上記の目的の達成を目指す。扱う文学作品は詩(特に描写詩と呼ばれるジャンル)と旅行記を中心とし、風景表象とロシア文化のアイデンティティ

の関わり等の問題に関する考察を試みた。分析に際しては歴史学・地域研究などの知見も参照した。

(2)

本研究のテーマに関連する文献資料をモスクワのロシア国立図書館、サンクト・ペテルブルクのロシア国民図書館、ヘルシンキのフィンランド国立図書館、ロンドンの英国図書館など内外の図書館で収集して分析を行った。特に、かつて帝政ロシアの領土内にあったため 18-19 世紀ロシアで刊行された文献を多数所蔵するヘルシンキの国立図書館をも積極的に利用し、資料収集に効率化を図った。

(3)

内外の研究会や学会発表の場を利用して意見交換を行った。特に、2011 年 8 月に北京で行われた ICCEES (国際中東欧研究協議会) 東アジア大会、および英国のスラヴ東欧学会の分科会である「18 世紀ロシア研究グループ」で 2012 年 1 月に行った報告には本研究の成果も盛り込まれているが、この報告の場を活かして国外の研究者と意見交換を行った。特に本研究の内容を補強する様々なディテールや先行研究について幅広く情報を得ることができた。

4. 研究成果

(1)

本研究の成果の一つとしては、平成 24 年 2 月に執筆した論文「カラムジンの著作における隠喩としての『英国式庭園』」がある。18-19 世紀ロシアを代表する文学者・歴史家カラムジンの著作において「自然そのもの」と「整形庭園」との比較の上でなされる英国式庭園の風景の賛美が、民主主義及び独裁制と対比された「穏健な君主制」への支持と結びついていることを明らかにしたこの論文は、世界のロシア文学研究において権威ある欧米の学術誌の一つ、エルゼビア出版「Russian literature」誌の 18 世紀ロシア文学特集号 (J. クライン編) への掲載が決定している。刊行が当初の予定より遅れており、本研究の期間中に間に合わなかったが、近日中に刊行の予定である。

(2)

研究代表者は平成 21 年より、風景表象と関連して、「ヴォルガ川」「ネヴァ川」「ウクライナ (小ロシア)」といったロシア帝国内の地理的形象が 18 世紀以降のロシア文学において担ってきた象徴性の問題にも取り組んできた。平成 24 年度には、他経費の援助も受けて英国で行った報告をもとに論文「エカテリーナ期-ナポレオン戦争期のロシア詩の中のヴォルガ」を発表し、18 - 19 世紀初

頭のロシア詩の中で描かれるヴォルガ川のイメージが、18 世紀半ばには国内の多くの川の一つ、18 世紀末には多民族帝国の代表的な川、19 世紀初頭には文化的に一枚岩なロシアの川というように変遷していくことを示した。また同年には、やはり他経費の援助も受けて北京で行った報告をもとにして論文「ナポレオン戦争期のロシア詩におけるヴォルガとネヴァの表象」を執筆し、中国語訳されて中国の学術誌に掲載された。ここでは、18 世紀のロシアの頌詩等ではペテルブルクの帝権と結びついたネヴァ川が専らロシアの代表的な川のイメージを担っていたが、ナポレオン戦争期にはヴォルガ川が新たな「ロシアの川」としてのイメージを取って現れることを示した。これらの研究は本研究と問題意識の一部を共有しており、本研究の成果が反映している。

(3)

平成 25 年度末には、平成 24 年度に他経費の援助も受けて執筆した論文「イズマイロフ『南ロシアへの旅』に描かれたウクライナ」が刊行された。この研究も本研究と問題意識の一部を共有しており、本研究の成果が反映している。特に、ロシアのアイデンティティを考える上で非常に重要なウクライナの表象の問題を、18 世紀末 - 19 世紀初頭のロシア知識人の旅行記を題材に用いながら考察した。

(4)

さらに本研究で得られた派生的ではあるが大きな成果としては、ロシア史上未曾有の大事件であり、近代ロシア文化の方向性を決定づけた 19 世紀初頭の対ナポレオン戦争の時代の文化に関する研究の深化が挙げられる。上記のように、本研究では風景表象とロシア文化のアイデンティティとの関連を明らかにすることを目的と定め、18-19 世紀初頭のロシア文学におけるロシアの風景の表れ方を探った。

特に平成 25 年度は、平成 24 年度までに行った研究成果を発展させ、歴史学の成果を参照しつつ、ロシアにおける地理認識の変化の系譜を探った。その際、前年度より、近代ロシア文化の一つの転機となったナポレオン戦争期の文学作品や雑誌記事に注目していたが、その中で、1812 年のフランス軍侵攻時にモスクワからの疎開をはじめとして人の移動が大規模に行われた事実に行き当たり、ロシアにおける地理認識の変容につながる条件として集中的に探究した。

平成 25 年 9 月には、モスクワのロシア国立図書館で資料収集を行い、上記の問題に関連する文献を多く収集した。その一つの成果として、19 世紀初頭のロシアを代表する寓話作家イワン・クルイロフによる、1812 年のモスクワからの疎開を題材とした作品『鴉と鶏』に着目した論文、「巣箱から飛立つ蜜蜂

の群れのように：クルイロフの寓話詩『鴉と鶏』と1812年のモスクワ」を公表した。この研究を通じ、当初否定的に意味づけされていたモスクワからの疎開という行為が、「愛国的」な好ましい行為として再解釈されていた点を明らかにした。この問題への理解をより深めるべく、近現代ロシア文化におけるナポレオン戦争の記憶をめぐる論文を現在執筆中である。空間移動という行為に対するこのような意識の変化が、当時モスクワから多くの人々が疎開した、ヴォルガ川沿岸をはじめとする多くのロシアの地方都市やその風景に対する眼差しをどのように変容させたかという点が今後の課題となる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 4 件)

鳥山祐介 イズマイロフ『南ロシアへの旅』に描かれたウクライナ「風景」「歴史」「信仰」をめぐる感傷旅行、山形大学人文学部叢書『ロシアの南：近代ロシア文化におけるヴォルガ下流域、ウクライナ、クリミア、コーカサス表象の研究』、査読無、第5号、2014年、1-22ページ

鳥山祐介 巣箱から飛立つ蜜蜂の群れのように：クルイロフの寓話詩『鴉と鶏』と1812年のモスクワ、千葉大学比較文化研究、査読有、第1号、2013年、122-137頁

鳥山祐介「エカテリーナ期-ナポレオン戦争期のロシア詩の中のヴォルガ」、文化空間の中のヴォルガ、査読無、2012年、35-67頁。

鳥山祐介「拿破仑战争时期俄国诗歌中的伏尔加河与涅瓦河形象」(贾茜訳)、俄罗斯文艺、査読無(依頼有)、第4号、2012年、16-19頁
(「ナポレオン戦争期のロシア詩におけるヴォルガとネヴァの表象」『ロシア文芸』第4号(北京師範大学『ロシア文芸』編集部)

[学会発表](計 4 件)

鳥山祐介 対ナポレオン戦争期のロシア文化と空間移動、日本ロシア文学会第62回研究発表会、2012年10月6日、同志社大学

鳥山祐介 1790-1800年代のロシアの旅行記に見る『南方ロシア』表象、生活空間、場の記憶、ジェンダー、探偵小説—ユーラシア比較文化の試み、2012年3月4日、北海道大学スラブ研究センター

鳥山祐介 Images of the Volga river in Russian poetry from the reign of Catherine II through the Napoleonic Wars、Study Group on Eighteenth-Century Russia、2012年1月5日、High Leigh Conference Centre, Hoddesdon

鳥山祐介 Образы Волги и Невы в русской поэзии времен Наполеоновской войны、3rd East Asian Conference for Slavic Eurasian Studies、2011年8月28日、Landmark Hotel, Beijing (「ナポレオン戦争期のロシア詩におけるヴォルガとネヴァの表象」)

[その他]

ホームページ等

<http://researchmap.jp/read0123339/>

6. 研究組織

(1)研究代表者

鳥山 祐介 (TORIYAMA YUSUKE)

千葉大学・文学部・准教授

研究者番号：40466694